

二の丸東側石垣の位置

津山城の東側は急峻な崖であり、その直下にある宮川が自然の防御線となっています。本丸から一段下がった東側には帯曲輪があります。この帯曲輪を構成するのは全長約 65 m、高さ 7～8 m の石垣で、天端は幅 5 m 程度の平坦面があります。この石垣に膨らみが見られたため、膨らみの部分を中心に石垣の解体修理を行うこととなりました。

これまでの調査では、石垣の北側の背面で石積みや、石が列に並んだ状態が確認されています（2 ページ参照）。

今回発掘調査を行った場所について

今回発掘調査を行ったのは、解体する二の丸東側石垣の南側にあたり、調査区の一部は「瓦櫓」という櫓が存在した部分にあたります。

石垣の解体修理にあたり、解体を行わない範囲のところで、石垣の天端（上面）に遺構が残っているか、またその遺構はどのようなものかを調べるために調査を行いました。

①背面石積みについて

発掘調査の結果、石垣の背面から石積みが見つかりました。

もともと表面に一部の石が露出していたことから、何らかの遺構が残っている可能性は考えられていましたが、石積みであることは今回の調査により初めて分かりました。石積みは、発掘調査区の北側については、昭和 40、41 年度の石垣修理のために一部石が動いています。概ね 3 段から 4 段の石が積み重ねられています。表の石垣と背面石積みの幅は約 1.8 m、石積みの高さは 1.6 m あります。

石積みの南側は瓦櫓があり、瓦櫓のところでは表の石垣は東に折れて出隅を形成しています。背面の石積みは、瓦櫓の手前までは幅約 1.8 m ですが、瓦櫓の部分では出隅の分幅が広くなり、3.3 m となります。ここまでは背面石積みは一直線になっていますが、櫓



「津山絵図」に描かれた二の丸東側石垣

の南側ではまた幅が狭くなり 1.8 m となります。

これらの石積みは、江戸時代の絵図からも分かるように、瓦屋根が葺かれた土塀が乗っていた石積みと考えられます。この土塀は現在解体を行っている石垣上に造られていたものであることから、昭和の修理を行った部分にもこのような石積みがあった可能性があります。

解体前の石垣天端の発掘調査により、一部で石列が見つかった箇所があります（2 ページ石列写真）。この石列は、解体する石垣の上面から 40cm 程度低くなったところからみつかったため、もう 1 段上に石がのることにより、土塀の基礎の石積みとなっていたと考えられます。その場合、上の 1 石は後世になくなったということになります。

背面で見つかった石積みの一部は瓦櫓の基礎の石垣となっています。背面の石の積み方から、瓦櫓が独立した櫓として石が積み、その後土塀の石積みが築かれたことが分かります。

②集石について

背面の石積みの西側（通路側）で、やや大きめの石の周りに小さめの河原石が集まった遺構が確認されました。この遺構は、石垣の天端や、現在の地表面から 60cm ほど下がったところで見つかりました。

この遺構は、背面石垣との位置関係から、塀の控え柱の下にあった石の可能性がありますが、この遺構の性格についてはもう少し検討する必要があります。

③在城期の地面の高さについて

発掘調査を行ったそれぞれの調査区において、黄褐色の固くしまった面が確認できました。このような面は、おそらく在城期には地表面であった可能性が高いと考えられるものです。今回の調査では、現在の地表面から、およそ 30cm～40cm 下の層から、かつての地表面と推測される層が見つかりました。

したがって、おおよそではありますが石積みの 2 石目の途中から上が地表面に出ていたと考えられます。

おわりに

発掘調査を行ったことにより、調査地が昭和の修理の手が加わっていない、江戸時代の様相がよく残っていることが分かりました。

背面の石積みは、土塀の基礎の石積みと考えられます。今回の調査地では概ね 3 段から 4 段でしたが、すべての背面についてではなく、北側では 2 段であった可能性があります。

今後まだ石垣の修理は続きますが、石垣の修理後、どのような形で石垣や塀が存在していたことを示すか等、今回の発掘調査の成果をもとに検討を重ねていく予定です。



五番門南石垣に復元された土塀



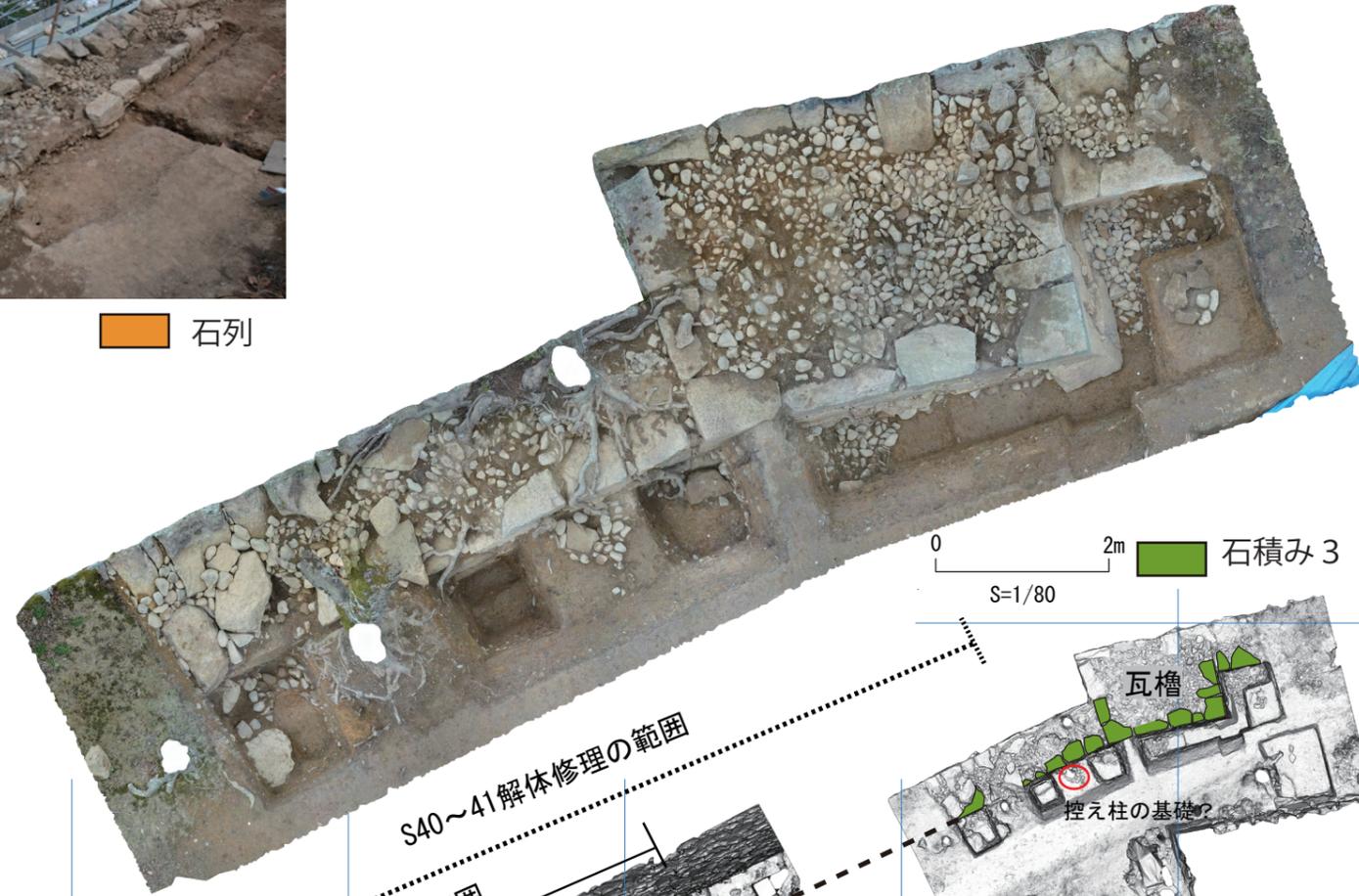
石積み1



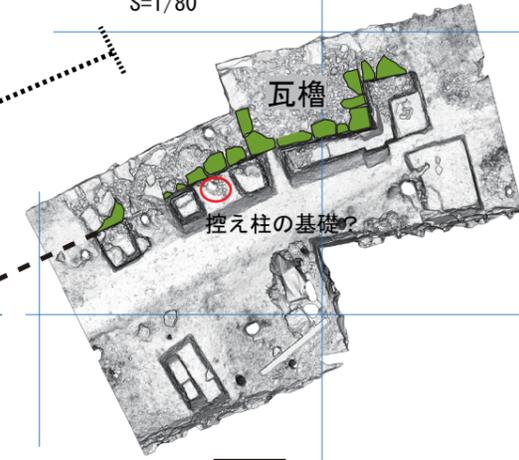
石列



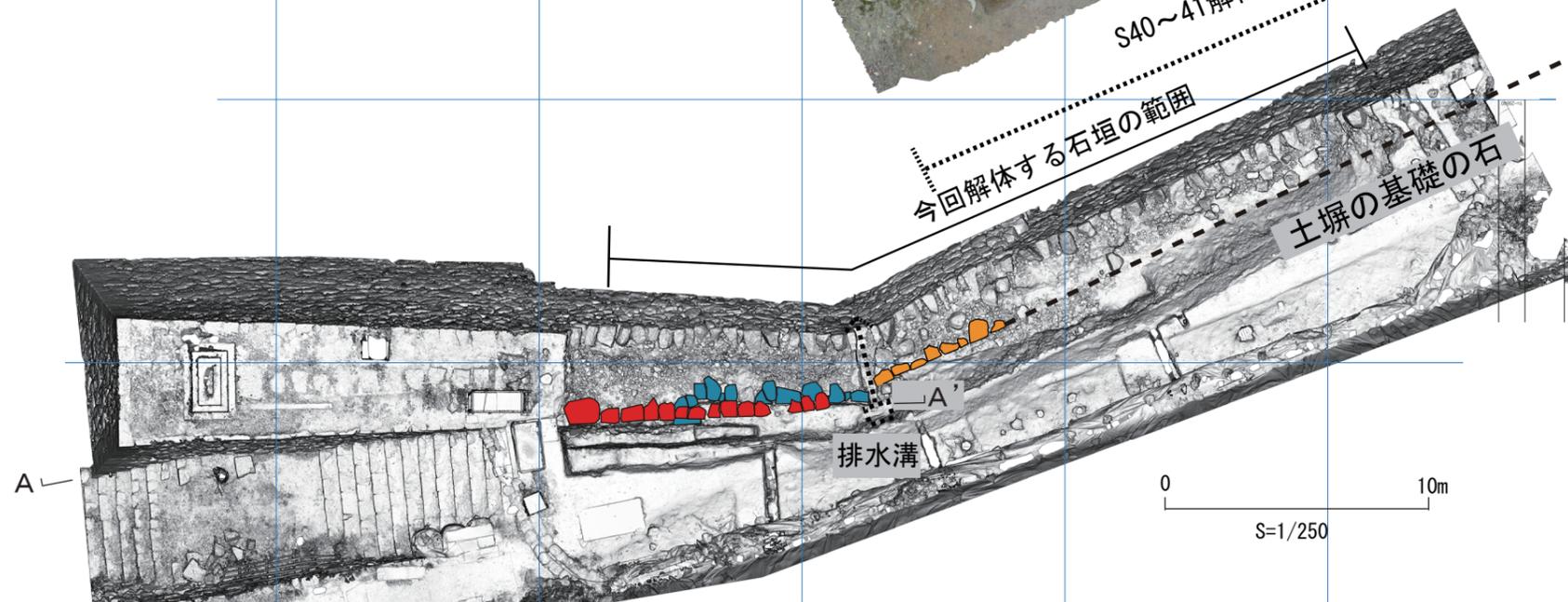
石積み2



0 2m S=1/80 石積み3



石積み3



0 10m S=1/250

石積み1
石積み2
石列



石積み1の立面図